

## ニジェール共和国サヘル地域における農耕民ハウサの干ばつへの対処法 The coping strategies of Hausa cultivators for the drought and land degradation in Sahe- lian Niger, West Africa

桐越 仁美<sup>1\*</sup>

Hitomi Kirikoshi<sup>1\*</sup>

<sup>1</sup> 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

<sup>1</sup> Graduate school of Asian and African area studies Kyoto university

サハラ砂漠の南縁に位置するサヘル地域では、耕作地の拡大や燃料確保のために樹木の伐採が増加し、土地荒廃、つまり砂漠化の問題が深刻になっている。また、天水に依存したトウジンビエとササゲの混作がおこなわれており、作物の収穫量が降水量の変動に大きく依存し、毎年のように食料不足が起きている。土地生産力の低下や作物収穫量の減少が生じる厳しい状況のもとで、ハウサの農耕民は樹木を重要な生態資源として活用し、環境の変動に対応するとともに、耕作地における土地生産力の維持と荒廃地における環境修復を図りながら、食料生産に従事している。本発表では、農耕民ハウサの樹木に対する認識とその利用を分析したうえで、土地荒廃や干ばつから生計を維持するための樹木を利用した対処方法について検討する。

住民は樹木を樹形によって4種類に分類し、その4種類はマヤンチ、マタシ、ラブ、バラウである。マヤンチは、樹高が約3m程度で1本もしくは2本の幹をもつ樹木であり、マタシは下方の枝が剪定された小さな樹木、ラブは樹齢が一年以下で剪定されていない樹木、バラウは樹齢が2年以上で剪定されていない樹木と認識されている。耕作地において、マヤンチは木陰と家畜の飼料、救荒食の確保に、マタシは飛砂のキャッチに、ラブとバラウは土地荒廃の対策に利用されていた。耕作地内では、樹木の配置、樹形の管理がおこなわれており、その様式には耕作者の意図が反映されていた。

耕作地内に分布する樹木は、耕作者により保有されているが、その用益権は耕作地内に作物が生育する雨季と、家畜や住民が端境期を迎える乾季とでは異なったものとなる。雨季には、畑の所有者以外の者が樹木の枝葉を採取することは強く制限され、枝葉を採取するには耕作者との交渉が必要となる。しかし、乾季になると、耕作地内に生育する樹木の枝葉の利用は村内の居住者に開放される。村びとが枝葉を採取することによって、不足しがちな家畜の飼料に充当したり、市場で販売することによって貴重な現金収入源とし、世帯の不足する食料を購入している。耕作地における樹木の存在は、作物の生産性の向上の妨げとなるが、毎年のように常態化する端境期の食料不足や、不測の干ばつを契機とした飢饉を乗り越えるためには欠かせない救荒食料を提供する。村の富裕層または1970年代、1980年代の干ばつの経験者は救荒食料となるバラニテス (*Balanites aegyptiaca*) を多く保有しており、飢饉の際の食料や飼料を村全体に提供する役割を担っている。耕作地内のバラニテスは、乾季には村人や周辺住民に開放される。救荒食料や飼料の採取は女性によっておこなわれ、採取場所は村人の耕作地に限らず他村の耕作地にまでおよぶ。食料が不足する雨季や干ばつ時の生計は、住民間のネットワークによって支えられていることが明らかとなった。

キーワード: ニジェール, 干ばつ, 土地荒廃, サヘル, 樹木利用

Keywords: Niger, drought, land degradation, Sahel, tree use